

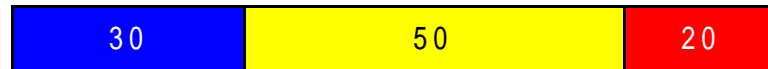
東北地方 3 か月予報（4～6 月）の解説

平成 13 年 3 月 21 日 仙台管区気象台

1. 予想される天候

（1）3 か月平均気温の予想される各階級の確率（％）

東北地方



低い 平年並 高い

3 か月平均気温の各階級の確率

〔概要〕

4～6 月の 3 か月平均気温は「平年並」の可能性が最も大きく、その確率は 50％です。「低い」の可能性が次に大きく、その確率は 30％です。「高い」の可能性は小さく、その確率は 20％です。

（2）可能性の大きな天候の特徴

4 月：高気圧と低気圧が交互に通る、天気は概ね数日の周期で変化するでしょう。東北日本海側では、低気圧や寒気の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

気温は低く、降水量は平年並でしょう。

5 月：高気圧と低気圧が交互に通る、天気は数日の周期で変化するでしょう。

気温は平年並ですが変動が大きく、晩霜の恐れがあります。降水量は平年並でしょう。

6 月：平年と同様に梅雨前線やオホーツク海高気圧の影響で曇りや雨の日が多く、低温となる時期があるでしょう。

気温、降水量共に平年並でしょう。

なお、4～6 月の 3 か月間の降水量は平年並でしょう。

< 参考資料 >

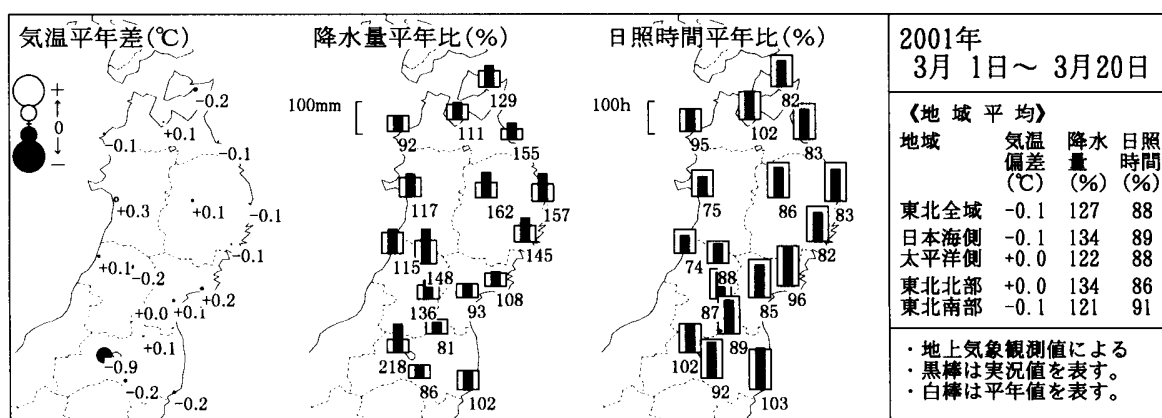
平年のおおよその天気出現日数（日）

	4 月		5 月		6 月	
	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側	東北日本海側	東北太平洋側
晴れの日	17	18	18	18	14	12
雨の日	11	9	10	9	10	10

注：季節予報では、「日照率 40％以上の日数」、「日降水量 1mm 以上の日数」をそれぞれ晴れの日、雨の日の目安として用いている。この 2 つの事象は同じ日に起こりうるため、両方に数えられる日もある。なお、日照率は 1 日の日照時間を可照時間（太陽の中心が東の地平線に現れてから西の地平線に没するまでの時間）で割った値である。

2. 最近の天候経過と循環場の特徴

(1) 最近の天候経過



東北地方における3月(1～20日まで)の平均気温、降水量、日照時間平年差(比)

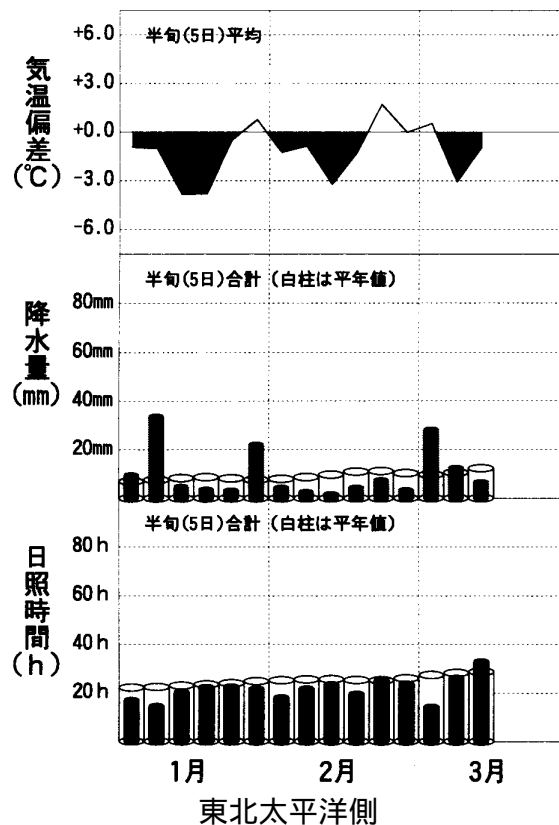
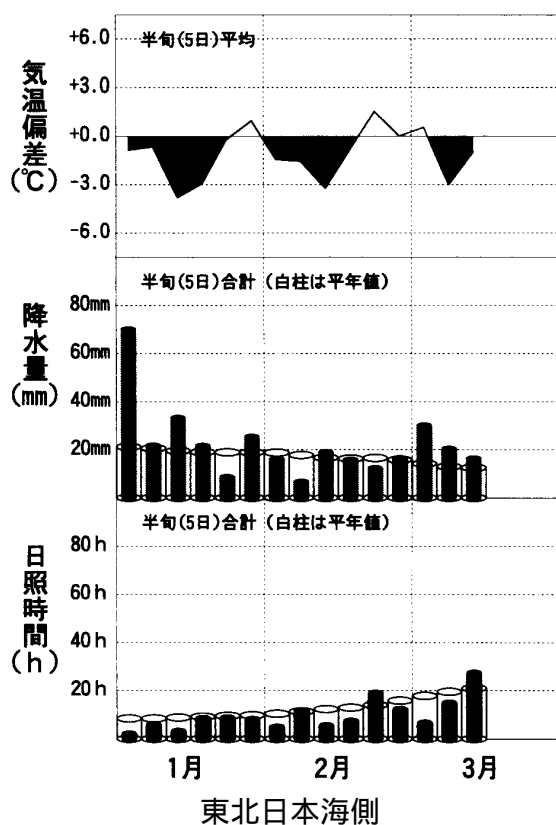
3月(20日まで): この期間の平均気温平年差は、東北地方で-0.1 と平年を下回ったが、変動は大きかった。降水量平年比は、東北地方で127%と平年を上回った。日照時間平年比は、東北地方で88%と平年を下回った。

上旬は、1日、4日、7日、10日と低気圧が周期的に通過し、東北地方は曇りで雪や雨となった。低気圧の通過後は冬型の気圧配置となって、東北日本海側を中心に曇りで雪の降る日が多かった。特に、5日は強い冬型の気圧配置となり、東北地方は雪で各地で風が強かった。また、7日には黄砂が観測された所があった。上旬半ば以降は強い寒気が南下して、気温の低い日が続いた。

上旬の平均気温平年差は、東北北部で-0.8 と低かったが、東北南部は-0.5 と平年並だった。降水量平年比は、東北日本海側で193%とかなり多く、東北太平洋側は211%と多かった。日照時間平年比は、東北地方で61%とかなり少なかった。

中旬は、低気圧と高気圧が交互に通り返り、天気は概ね周期的に変化した。12～13日は東北地方を通過した低気圧の影響で大雪となり、15日は寒冷前線、17～18日は南岸低気圧の通過により雨となる所があった。低気圧の通過後は一時的に冬型の気圧配置が強まって暴風となる所もあった。中旬はじめは気温が低かったが、後半は4月並の陽気となり、気温の変動が大きかった。

中旬の平均気温平年差は、東北北部で+0.9 と高く、東北南部で+0.3 と平年並だった。降水量平年比は、東北地方で76%と平年並だった。日照時間平年比は、東北北部で104%と平年並だったが、東北南部で120%と多かった。

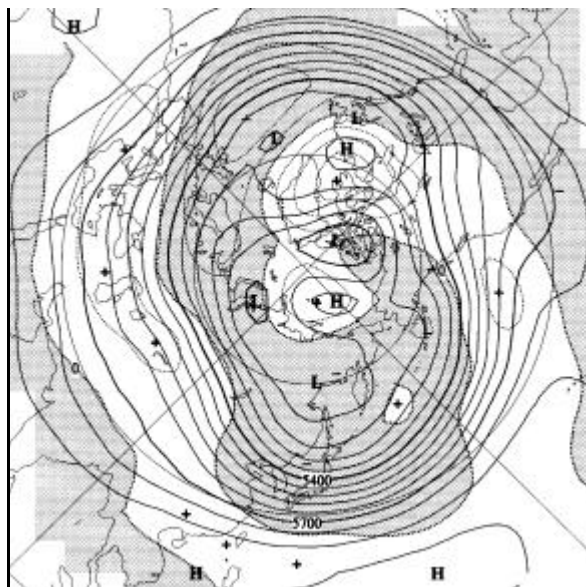


半旬経過図

(2) 中・高緯度の循環

3月(20日まで): 500hPa 高度場では、2月に引き続き極付近が高压部となったため極渦はオホーツク海まで南下して、極東域の中高緯度は広く負偏差域に覆われた。また、バイカル湖付近では気圧の尾根が強まり、日本付近に強い寒気が南下しやすい大気の流れとなった。

このため、東北地方は2月に引き続き寒気が南下しやすい場となり、上旬半ばから中旬はじめにかけて厳しい寒さが続いた。しかし、中旬後半には南から暖かい空気が流れこんで4月並の陽気となった。



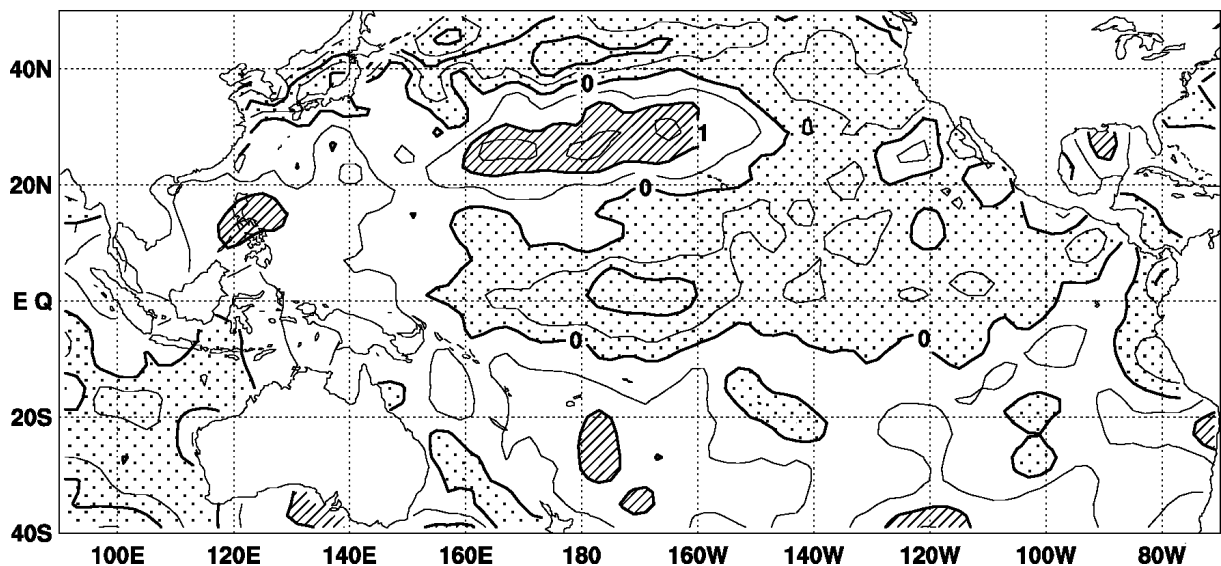
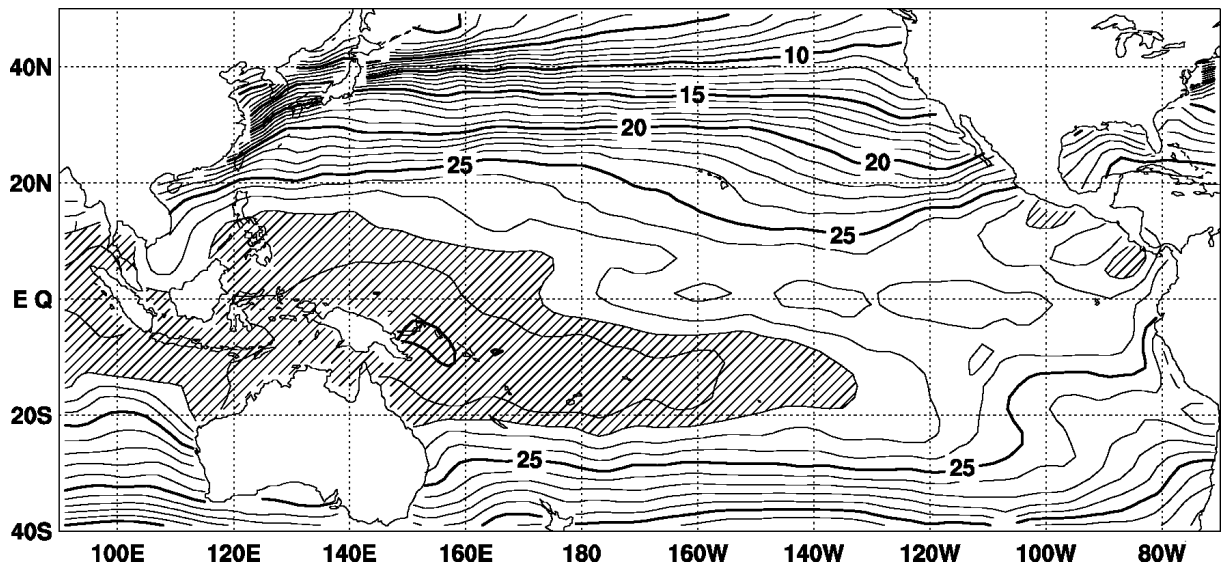
3月1~20日平均 500hPa 天気図
等高度線間隔 60m
陰影部は平年より高度が低い領域

(3) 熱帯太平洋の状況

エルニーニョ監視海域（北緯4度～南緯4度、西経150度～西経90度）の2月の海面水温の基準値（1961～1990年の30年平均値）との差は、-0.2 であった。

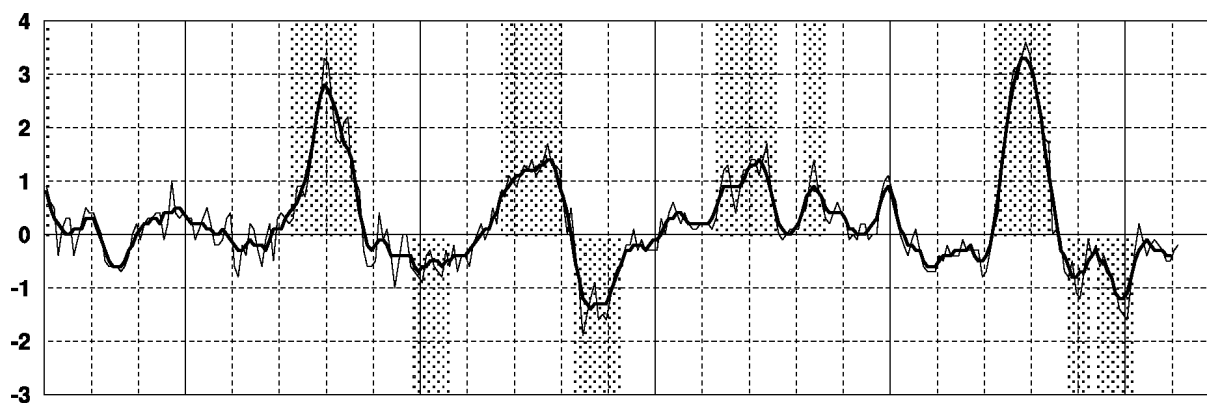
2月の太平洋赤道域の海面水温は、東経165度から西経155度にかけてと西経140度付近で平年より0.5 以上低く、日付変更線から西経160度にかけては-1 以下の負偏差が見られた。一方、東経130度から東経150度では平年より0.5 以上高かった。

2月の南方振動指数は+1.0（暫定値）であった。（南方振動指数は貿易風の強さの目安であり、正（負）の値は貿易風が強（弱）いうことを示す。）



2001 年 2 月の海面水温図（上）及び平年偏差図（下）

海面水温図の太線は5 毎、細線は1 毎の、平年偏差図の太線は1 毎、細線は0.5 毎の等値線を示す。海面水温図の陰影部は28 以上の領域を、偏差図の濃い（淡い）陰影部は+1 以上の正偏差域（0 以下の負偏差域）を示す（平年値は1971～2000年の30年平均値）。



エルニーニョ監視海域の月平均海面水温の基準値との差（ ）の推移
(1977年1月～2001年2月)

折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示し、正の値は基準値より高いことを示す。エルニーニョ現象の発生期間は上側に、ラニーニャ現象の発生期間は下側に、それぞれ陰影を施してある(基準値は1961～90年の30年平均値)。

(4) エルニーニョ現象等の今後の見通し(2001年3月～2001年9月)

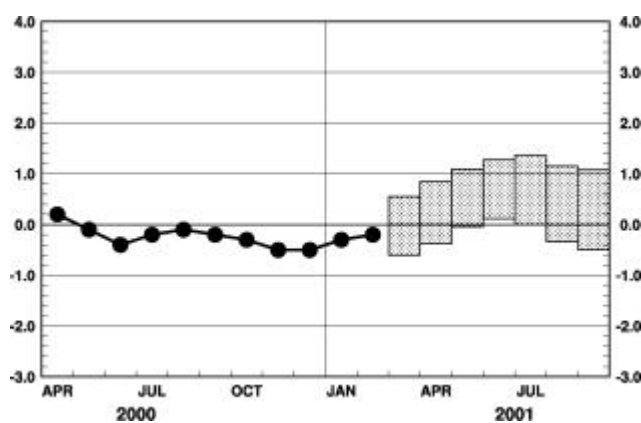
エルニーニョ監視海域の海面水温は、春はこのまま基準値(1961～1990年の30年平均値)に近い値が続き、夏から9月にかけては基準値よりやや高い状態で推移する可能性が大きいと予測される。

【解説】

エルニーニョ監視海域の海面水温は、この冬に入って徐々に基準値に近づいており、2月には基準値との差が-0.2となった。しかし、南方振動指数は+1.0で貿易風は依然として平年より強く、太平洋中部には海面水温が平年より1以上低い海域も見られる。また、赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度-時間断面図(図略)でも、西部に蓄積している暖水には先月と大きな違いは見られない。

エルニーニョ予測モデルは、監視海域の海面水温が今後次第に基準値を上回る状態に変化し、夏は基準値よりやや高くなると予測している(右図)。

これらのことから、エルニーニョ監視海域の海面水温は、春はこのまま基準値(1961～1990年の30年平均値)に近い値が続くと予測される。夏から9月にかけては基準値よりやや高い状態で推移する可能性が大きい。エルニーニョ現象となるかどうかについては、今後の推移を注意深く監視する必要がある。



エルニーニョ予測モデルによる

エルニーニョ監視海域の海面水温偏差予測
この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温(基準値との差)の先月までの推移(折れ線グラフ)とエルニーニョ予測モデルから得られた今後の予測(ボックス)を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。

(基準値は1961～1990年の30年平均値)

3. 前回(2月20日)発表の3か月予報からの変更点

4月 気温 平年並 低い